

2017年度 スミス・カレッジ調査の目的・ 調査経緯とインタビューの解説及び補足

—Wong の出願への対応とトランスジェンダー学生の受け入れを中心に—

Research Purpose and Procedure at Smith College in 2017 and
Comments on Two Interviews : Focusing on Acceptance of
Transgender Students

安東 由則*

ANDO, Yoshinori

目次

はじめに

1. 調査の目的
2. インタビュー調査及びまとめの手続き
3. Smith & Shaver 両氏へのインタビュー：
Wong の Smith College への出願とその
後の展開
4. Ohotnicky & Shaw 両氏へのインタビュー：
トランスジェンダー学生を含む学生生活
への支援

おわりに

注

引用文献

* 武庫川女子大学文学部・教授、教育研究所・研究員

はじめに

2015年より4か年計画にて科学研究費助成事業（基盤C）として、「女子大学の存立意義とサバイバルストラテジー：日本・アメリカ・韓国の国際比較」（課題番号15K04327）とのテーマで研究に取り組んでおり、その一環としてアメリカ合衆国、マサチューセッツ州にある名門女子大学、スミス・カレッジ（Smith College…以下、“スミス大学”と記載）でインタビュー調査を計画・実施した。2017年3月に行った初めてのインタビュー調査については、前号（『研究レポート』48号）において二つのインタビュー記録を掲載した¹。しかしながらその際、季節外れの吹雪に阻まれ、予定した調査の半分も実行することができなかった。そこで、もう一度スミス大学を訪れ、実行できなかった調査対象者へのインタビューに加え、新たなトピックについてもインタビューを実行できるよう再度依頼し、快諾を得た。

再調査の調整については、前回インタビューに応じて頂いたAudrey Smith（以下、Smith）副学長（the Vice President for Enrollment）とその秘書（Executive Assistant to the Dean of the College and to the Vice President for Enrollment）であるSusan Zachary（以下、Zachary）氏に引き続きお世話になった。特にZachary氏には、前回に引き続いて著者が提示した調査トピックと日程に合わせて迅速かつ丁寧に綿密なスケジュールを組んでいただいた。その結果、2017年11月8日～10日まで、インタビューと授業参観、施設見学ができることとなり、訪問直前になって学生との昼食も加えていただくなど、高配をいただいた。

今回の訪問においては、武庫川女子大学共通教育部・准教授で、教育研究所・研究員でもある西尾亜希子も加わることとなった。西尾は、2017-19年度の科学研究費助成事業（基盤C）「女子大学生のための「お金」の視点を取り入れたキャリア教育カリキュラムの開発」に取り組んでおり、アメリカの女子大学で実施されている教育プログラムを探るべく、スミス大学に同行し、スミスにおける全てのインタビュー調査を共同で実施することとした。

1. 調査の目的

研究全体の目的は、海外の女子大学における学生募集、授業や大学生活の実際とその取り組みを調査し、女子大学としての理念をどのように考え、女子／女性のためのプログラムをつくり、環境を整えているのかを明らかにして、日本の女子大学に資する提案をすることである。今回対象としたスミス大学は、ウェルズリー大学と並ぶアメリカの女子大学のトップ校であり、工学専攻（Major of Engineering）を創設する、大きな寄付活動に成功するなど²、非常に活気ある女子大学としても知られる。このスミス大学に焦点を絞り、その取り組みの実際を明らかにすることが本調査の目的であり、大きくは次の三つか

らなる。

一つは、女子大学におけるジェンダー学生に関する課題や取り組みについて聞き取ることであり、これが今回の主要目的でもある。これに関しては、入学担当者、学生生活担当者、授業担当者の三方面から聞き取りを行うこととした。

まず、入学担当者に対するスミス大学の入学方針転換の経緯に関する聞き取りを、本調査における最重要課題と位置付けた。トランスジェンダー学生の女子大学への入学をめぐる、女子大学はもとより全米で活発な議論が沸き起こり、大きな方向転換を行うことになった。その発端は、スミス大学の2013年入試において、トランスジェンダー学生が入学志願を拒否されたことであった。この件はマスコミやネットで大きく取り上げられ、スミス大学は活動家やマスコミなどからの批判や抗議の矢面に立たされることとなり、その後、入試方策に関する委員会を設けるなどして合意形成を図り、2015年5月に学長と理事長名で新たな方針を発表するに至る。この間、設けられた研究会ではどのような議論がなされ、最終方針が決定されるに至ったのか、その詳細を語ってもらうこととした。日本においてもトランスジェンダー学生の女子大学への入学検討が新聞等で取り上げられ、議論がされ始めた時期であり、関心が高まってきたという背景もある³。スミス大学の対応と方針決定過程の詳細については、新たな入学方針を検討する委員会の共同議長を務めたSmith副学長と、トランスジェンダー学生の受験とそれをめぐる騒動に対応したShaver入学担当部長という、その内実を最もよく知るお二人に答えていただけるという幸運に恵まれた。

さらに、ほとんどの学生がキャンパス内に35あるハウス（House）や複合施設（Complex）で生活するスミス大学では、ハウスでの生活が学生にとって重要な意味を持つことから、ハウスを含むキャンパスでの学生生活全般を通して、トランスジェンダー学生を含む学生全体に対してどのような配慮がなされ、サポートがされているのかを尋ねることとした。インタビューにはJulienne Ohotnicky（以下、Ohotnicky）学生部長（Dean of Students）とBecky Shaw（以下、Shaw）学生部副部長（Associate Dean of Students）という、内実を最もよく知る最適のお二人に答えていただけることとなった。本『研究レポート』では、以上の二つのインタビューを掲載した。

もう一つのインタビュー対象者は教員のKimberly Kono准教授である。Kono氏はカリフォルニア育ちの日系人女性で、日本語・日本文学・日本文化のコースで教育・指導を行っている⁴。マンガ等の日本のポップカルチャーやフェミニズムにも造詣が深い。Kono氏については、我々の質問内容に沿って副学長秘書のZachary氏が調査対象者として選定し、アポイントを取っていただいた。インタビューでスミス大学における女子教育、ジェンダーを意識した授業や学生の行動などについて尋ねたが、こうした点についてさほど意識的に行っていることはないし、女子大学特有の行動ということも殊更に意識していない

ということであった。氏はカリフォルニアの生まれ育ちで、学部から博士取得までUCB (University of California, Berkeley) の出身であるということも関係しているのかもしれない。

二つ目の調査目的は、女子大学が弱いとされてきた経済や自然科学の分野における教育プログラム (STEM: Science, Technology, Engineering & Mathematics、など)、あるいは起業家プログラム (Entrepreneurship) において、どのような意図でいかなる内容の取り組みがなされているかを知ることである。これは、2017年3月の訪問時にインタビューを予定していたが、吹雪のために実行できなかったものである。女子大学においても自然科学の重要性は指摘されており、特にトップの女子大学においては、大学卒業後、医学部 (Medical School) をはじめ理系の大学院に進学する者が多いこともあって、自然科学は重視されてきた。先にも指摘したように、スミスは工学の専攻を設け、The Picker Engineering Program を提供するなど、自然科学系のプログラムに重点を置いていることでも知られる。ただ今回は自然科学系カリキュラム全般について尋ねることはできず、Jill Ker Conway Innovation & Entrepreneurship Center が2001年から提供する Financial Education Program に焦点を絞って話を伺うこととした⁵。インタビュー対象者も、3月に予定していた Conway Center のプログラム・ディレクター、Rene Heavlow 氏に承諾していただいた。学内外の教員による講義、学外資金の獲得による催しや全国規模集会への参加、実際の株の運用など、多様なプログラムが工夫され、実行されていた。これについては、本調査を共同で行った西尾が後日、研究論文としてまとめることになる。

三つ目は、授業参観と学生へのインタビューである。これも3月訪問の際に予定していたが、大雪で学校が閉鎖となったため実現しなかったものである。高橋温子先生 (Senior Lecturer) の協力を得て、日本語クラス (8名) の授業に参加させていただき、授業の最後に女子大学の存立意義やトランスジェンダー学生の受け入れについて質問する時間を作っていただいた。また、キャンパスツアーで案内してくれた2名の学生もこの授業を履修しており、3時間近くに及ぶツアーの間に、個々に質問することもできた。さらに、高橋先生からは過日、宿題として女子大学の存続やトランスジェンダー学生の受け入れについて簡単なレポートを学生に課しておられ、その内容を見せていただくなど配慮していただいた。質問に対する学生の意見については、十分な聞き込みができていないため、『研究レポート』には掲載しない。インタビューの脚注として、レポートの内容を一部援用させていただく。

先述のように、今回のこれら三つの調査目的のうち、トランスジェンダー学生の受け入れ政策の変化についてのインタビューと、トランスジェンダー学生を中心とした学生生活の支援についてのインタビューの計2本を本号に掲載し、本論においてはそれぞれのインタビューについての解説を行うこととする。

2. インタビュー調査及びまとめの手続き

(1) インタビュー調査の手続き

2017年9月下旬、Smith 副学長宛に年内（11月頃）の再度インタビュー調査を実施したい旨のEメールに、インタビューの狙いと質問の骨子を添付して送付した。これを受けて、秘書のZachary氏が対象者とインタビュー日時を調整したスケジュールを作成し、返送していただいた。11月1日、インタビュー対象者ごとに作成した質問内容をZachary氏に送付し、氏からそれぞれの対象者に送付をお願いした。その日程表については、表1にまとめている。

インタビューの質問内容については、それぞれの調査目的に沿って安東が作成した後、西尾が質問を付け加えるなどし、相互に了解をとった。質問内容はできるだけ簡潔になるように努め、各インタビューにつき、A4用紙2枚程度にまとめた。

インタビューにおいては、予め送付した質問内容と質問順を意識して実施したが、話の流れによっては全ての質問項目に触れることはできず、あるトピックを掘り下げることとなった。また、インタビュー対象者が、予め送った質問用紙を用意し、それに沿った答えをして頂くこともあった。なお、インタビューの冒頭において、ICレコーダーへの録音とインタビュー内容の学術雑誌への収録の許可を得た。終了後、お礼を述べるとともに、インタビューをテキスト化したのち不明な点があればEメールで確認してもよいとの了解をとり、メールアドレスを交換した。

表1. スミス・カレッジにおけるインタビュー・スケジュール（2017年11月）

日付	時間	対象者と所属	場所
11月8日（水）	15:00-16:00	Kimberly Kono, Associate Professor Department of East Asian Language and Literature	Dewey House
11月9日（木）	9:30-10:30	Rene Heavlow, Program Director Jill Ker Conway Innovation and Entrepreneurship Center	146 Elm Street
	11:00-Noon	Audrey Smith, Vice President for Enrollment Debra Shaver, Dean of Admission	College Hall
	14:30-17:30	Campus Tour with two Japanese-speaking Students	
11月10日（金）	10:00-11:30	Julianne Ohotnicky, Dean of Students and Associate Dean of the College Becky Shaw, Associate Dean of Students and Direc- tor of Residence Life	Clark Hall & Resource Center
	Lunch	with two students (international student and trans- gender student)	
	13:10-14:30	Attend 4th-year Japanese class of Atuko Takahashi, Senior Lecturer Department of East Asian Language and Literature	Seelye Hall

(2) インタビュー記録を作成する手続き

まず、業者を通じて、録音したインタビュー記録を英語テキストに書き起こした。その後、書き起こした英語テキストの不明部分を補う、不要な部分を削除するなどして修正テキストを作成した。翻訳には時間を要することもあり、翻訳業者に依頼し、日本語テキストを作成した。翻訳については、おおよそ話しの流れが分かればよい粗訳で十分だと判断し、シングルチェックとした。その後、業者が作成した日本語テキストと、英語テキストを見比べながら筆者が翻訳の確認をするとともに、専門用語のチェックを行った。文脈が分からない場合は、音声を聞くなどして確認した。結果として、少なからず最初の翻訳を修正する必要があった。インタビューでの発言と日本語訳の間に間違いがあるとすれば、筆者の訳出ミスである。

完成した日本語翻訳テキストを、さらに次のような手順で編集していった。まず、話しが分かりやすいようにごく一部の内容については、内容を損なわない範囲で順番を入れ替えた。また前に話した内容が重複している部分については、会話の流れを損なわない範囲で削除している。日本語文章を整えた後、読みやすくなるように見出しをつけて番号を振った。インタビューということもあり、必ずしも論理的な流れとはなっていないことを断っておく。最後に、語られた内容だけでは背景も分からず理解が難しいこともあるので、できるだけ脚注をつけ説明を試みた。

以上が調査及びまとめ方の手順である。以下では、① Smith 副学長と Shaver 入学担当部長へのインタビューと、② Ohotnicky 学生部長と Shaw 学生部副部長へのインタビューについての解説を行う。前者の入学方針の転換をめぐるインタビューの解説においては、トランスジェンダー女性 Calliope Wong の入学審査をめぐる騒動が大きなポイントとなっているものの、インタビューにおいてはそれを所与のものとして、その内容や展開について語られていない。スミス大学のみならずアメリカの女子大学がトランスジェンダー学生受け入れへと方針転換をするきっかけとなった事件であるので、次節においてはその経緯を中心に解説していく。

3. Smith & Shaver 両氏へのインタビュー：Wong の Smith College への出願とその後の展開

(1) 騒動の端緒

女子大学がトランスジェンダー女性の入学を認めるように方針転換をするようになった契機は、コネチカット州に住む Calliope Wong という高校生が、2013 年にスミス大学へ入学願書を出願したことから始まる。

Wong は中国人移民の家族に男性として生まれ、男性として育てられたが、成長につれて違和感を持ち始め、15 才の時にトランス・ウーマン (trans woman) であることをカミン

グアウトした⁶。彼女はマサチューセッツ州の名門女子大学で、リベラルな学風で知られるスミス大学への入学を希望するようになる。その準備のためか、2012年8月にはtumblr⁷に初めて投稿を行い、トランスジェンダーであるとの自己紹介と、スミス大学がトランス・ウーマンを受け入れないのはおかしい、受け入れるべきだとする主張を行った。その投稿の中で、マサチューセッツ州やコネチカット州の出生証明書の性別を変えるには高額な外科手術を受ける必要があり、大学入学前の高校生にそのようなことは困難であるとも述べている⁸。さらに、志願直前のこの夏にはスミス大学のDean of Admission（名前は書かれていないがShaver氏のこと）と広範囲にわたって話したとも述べている⁹。このように準備して、2013年2月～3月に入学願書をスミスに送付したが、一度ならず二度も願書は送り返された。そこでWongは、スミス大学に入学することはできなくなったとする文章と、スミス大学から送付されてきた願書を受け付けられない理由を書いた手紙をtumblrへ投稿した（2013年3月10日付）。一度目の拒否は、成績証明書（transcript）に事務的なミスで“male”と書かれていたという理由で送り返された。この時期の記載はないが、2月終わり頃だと思われる。前年の夏、WongはShaver入学担当部長と彼女自身の事情について詳細に打ち合わせたにも関わらず、そのような事務的なミスで送り返されたと綴った。その後、高校のカウンセラーとミスを訂正して再送付した。しかし今度は、FAFSA（Free Application for Federal Student Aid）、すなわち連邦政府学生支援無料申請書の性別欄に“male”との記載¹⁰があったことを理由に、スミス大学は願書の受付を拒否し、3月5日付で願書と郵送料を送り返したのである。それには、入学担当部長Debra Shaver名で、受け付け拒否理由を示す次のような手紙がつけられていた¹¹。

再度、スミス（への入学）に関心を持っていただいてありがとう。（略）あなたは、以前に私たちが行ったやり取りを覚えていらっしゃるでしょうが、スミスは女子大学であり、このことは学部への入学志願者は、入学時において女性でなければならないことを意味します。（略）連邦政府学生支援無料申請書において、あなたの性別は男性となっております。よって、スミスはあなたの申請書を受け付けることはできません。

Shaver部長は“以前に私たちが行ったやり取り”と述べており、前年夏にEメールのやり取りをした際、スミスの考え方をきちんと伝えたと思っている節がある。これに対しWongは、夏にShaver部長と学校からの提出書類に全てfemaleと記述することを確認した際、“あなたの願書は正当な評価を受けるでしょう”とShaver部長は述べたが、FAFSAの記載については何も述べなかったとして、彼女に裏切られたと感じているとブログに書き込んだ¹²。前年の夏の時点で両者は認識を共有しておらず、差異があったよう

だ。この投稿を境に、Shaver 入学担当部長はマスコミ取材や活動家からの抗議を受けるなど、以降の取材対応において矢面に立つこととなった。

以下においては、ネットを中心に検索し、見つけることができた新聞・TV、オンラインメディア等の報道記事を中心に、この件をめぐる動きを追っていく。

(2) 投稿後のこの件をめぐる言説と動向

1) 投稿直後の動き

Huffpost はいち早くこの件に注目し、継続的に報じたマスメディアの一つである。3月21日には“Smith College Rejects Female Transgender Student Calliope Wong ; Applicant Ruled ‘Male’ By Admissions” との記事 (Bennett-Smith) で、次のようなことを伝えた。スミス大学から送られてきた受付拒否の理由と、先に述べた前年夏の Shaver 部長とのやり取りを Wong のブログから引用する形で伝えるとともに、Wong の主張を支持するスミス大学の学生組織 Smith Q&A (Queers and Allies) ¹³ が彼女を擁護する集会を開き、フェイスブックを通じて彼女を支援するための写真プロジェクトを発足させ、プラカードを作っている。記事の最後に、「私がこの運動を行うのは、私に続くトランスジェンダーの人々のためであり、そうすることによってよりよい (入学) 方針、より公平な教育システムを残していけるからです」との Wong の言葉で締めくくっている。

その翌日 (22 日)、大衆紙である *USA Today* も、“Smith College rejects transgender applicant“ (DiBlasio) とのタイトルで、*tumblr* への Wong の投稿を引用しつつ、一連の経緯を中心に報道した。さらに、25 日には *abcNEWS* が“All-Female Smith College Returns Transgender Woman’s Admissions Application” (James) と題して、29 日には *Reuters* が“Elite women’s college rejects transgender student, prompts outcry” (Howard) とのタイトルで事の経緯を伝えているが、*abcNEWS* と *Reuters* の記事では、教育やスポーツの分野における性差別を禁止している Title IX (教育改正法第 9 編) にも言及し、これに抵触することで連邦からの補助金を失う可能性に言及するものの、女子のみを対象とする私立大学なのでその可能性は低いとの Wong の見方を示している。*abcNEWS* の記事は、Wong が強調している、兵役ために使用されるはずの FAFSA の性別欄を、大学の志願者選抜の恣意的な妨害道具として使うべきではないという点を詳しく述べた。

4月30日 *MassLive.com*、5月1日 *Huffpost* (Mogan)、2日 *MassLive.com* (Constantine) の記事には、スミスの学生グループ Smith Q&A が‘Change.org’ というサイトを利用して 4,000 名以上の嘆願書を集め、5月2日にスミス大学の責任者に提出すると報道した。2日に二箱もの Wong を支持する嘆願書を受け取った際、Shaver 入学担当部長は「これは進展中の課題です。私たちはトランスジェンダー女性に対して支持的でありたい」と語り、さらに大学は学生との対話をはじめ、9月からも継続して行う旨を伝えた (*MassLive*).

com May 2, 2013)。こうした SNS を活用したスミスの学生や卒業生らの活動は、支援組織やネットメディアや地方新聞等においても取り上げられ、広く全米に知れわたることとなった。

2) 翌年（2014 年）における動き

その出来事が報道されてから約 1 年余後、2014 年 4 月 22 日の *BuzzFeed.com* の記事 “Smith College Students Continue Fight Over ‘Discriminatory’ Policy on Transgender Applicants” (Merevick & Yandoli) には、Smith Q&A の活動家らが入学の方針を変えるよう大学側と交渉しているのだが、彼女らの要望は聞き入れられていないとして、明後日 24 日（木曜）にデモを組織する予定だと伝えた。これまでの交渉で、2014 年 1 月に Audrey Smith 副学長から提出されたメモには、志願者が一貫して女性と記載されていなければならないとする書類から学資援助に関する書類を除くことを、大学当局は Q&A の活動家と合意したと書かれている。この程度の進展はあったものの、*BuzzFeed* が Laurie Fenlason 広報担当副学長に尋ねたところによれば、入学志願者は女性に限るとする方針に変わりはないと述べたと伝えている。LGBTQ (Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, Queer) に対する表現をモニタリングしている非営利団体 GLAAD (Gay & Lesbian Alliance Against Defamation) の HP において同日（4 月 22 日）の記事として、“GLAAD speaks to BuzzFeed about need for trans-inclusive admissions policy at Smith College” (Heffernan) を掲載し、Smith Q&A の活動家たちが 24 日にデモをすることを伝え、“スミスの管理者たちは将来大学生となるトランスジェンダーの生徒たちに危険なメッセージを送ることを中止すべきだ”と述べている。GLAAD には広報戦略担当者 (Media Strategist) がおり、学生たちと連携を取り、アドバイスを与えていたことが伺える。

後に掲載するインタビューでも語られるように、学生のデモも盛んに行われたようだ。11 月に行われる大学のオープンハウスの日にも学生のデモは行われており、大学当局は志願者の減少を心配せざるをえなかった。また、スミスは 2012 年から Women for the World Campaign を始め、450million ドル（約 500 億円）の寄付集めを目指していたので、これへの影響も懸念していたと思われる。

このような騒動が続く中、*The New York Times* 紙は 2014 年 5 月 24 日、オピニオン欄に Feldman 記者の署名で “Who Are Women’s Colleges For?” (女子大学は誰のためのものか) との記事を掲載した。Wong の出願からこれまでのスミス大学の対応をまとめ、カリフォルニアのミルズ大学 (Mills College) が志願者本人の規定する性別を認める方針に転換することとそれに対する懸念の声、バーナード大学 (Barnard College) の学長へのインタビューで学長は、それほど遠くない時期に (入学方針に関する) 案を示すだろうと述べたことなどを伝えた¹⁴。そうして最後に、“1960 年に 200 校あった女子大学は、今日では

46校となり、学生数も落ち込んでいる。近視眼的に入学したいとするあらゆる女性に対して入学を認めないことは、事態を悪くするだけのようと思われる。女性の権利を進展させようとする精神をもって創設された女子大学は、社会を先導し、トランスジェンダー女性を受け入れるべきである”と結んだ。また *TIME* 誌では“Women’s Colleges Are on the Wrong Side of History on Transgender Women”（女子大学はトランス女性の歴史に逆行している）と題した女子大学に対する強烈な批判記事を掲載した（Cummings & Spade）。このような社会からの後押しもあり、女子大学ではそれぞれにトランスジェンダー学生の受け入れについての話し合いが始まり、トランスジェンダー学生の受け入れを認める流れが作られていくことになる。

3) 女子大学の方針転換の発表

同年8月末には、ミルズ大学（Mills College）が入学方針を転換し、トランスジェンダー学生（女性）を受け入れるようになることが報道された（Nicholas, *Huffpost*, Aug.25, 2014 など）。The Civic Rights Movement HP の記事（Witkin, Aug.28, 2014）にはその経緯が少し詳しく述べられており、同年5月にトランスジェンダー女性を受け入れるという方針を決定し、学生が授業に戻ってくる8月27日からその方針は発効することになったと伝えた。ミルズでは、トランスジェンダー女性の入学を許可し、その確認方法は証明できる情報（legally assigned to female sex）を提供することとしている¹⁵。そうした報道からわずか数日後の9月2日、マウント・ホリヨーク大学（Mount Holyoke College）の Lynn Pasquerella 学長が新入学生歓迎の挨拶で、トランスジェンダー学生の入学を認める方針を発表したのである。学生らの多くは歓声や拍手でこれを歓迎し、スピーチはしばしば中断したと伝えている（Jaschik, *INSIDE HIGHER ED*, Sept.3, 2014；Mosbergen, *Huffpost*, Sept.3, 2014 など）。この発表が大きな驚きをもって迎えられたのは、自己認識（性自認）によって女性であることを認めるとともに、トランス男性（出生時には女性とされたが大学入学時に男性を自認している者）の入学も許可したことであった。学生らの強い運動もあったようである。

東西の二つの伝統ある女子大学が入学規定に関する方針の転換を表明し、大きな流れが形成され始めた。そうした中、*The New York Times* は“When Women Become Men at Wellesley”と題する長文の記事を掲載する（Padawer, Oct.15, 2014）。ミルズやマウントホリヨークの決定を例示しながら、あるいは入学後に男性となった学生の言説を紹介しながら、トランスジェンダー学生のウェルズリー大学での位置づけを問うている。8月に記者が大学の管理者にインタビューしようとした際には、ジェンダーが男女に二分されるものであるとはもはや考えられていない時代において、女子大学はどうあるべきかまだきちんと答えられないと述べ、学長や入学担当部長は記者と話すことを拒否した。しかし、マ

ウントホリヨークの発表の数日後には、トランスジェンダー学生の問題について考え始めるとの発表を行った。ウェルズリー大学には豊かな伝統があり、目の前にはトランス学生がいるにも関わらず、トランスジェンダー学生の受け入れについて後手に回る管理者側を批判的に書き立てている。

女子大学がトランスジェンダー男性まで受け入れるか否かは別にして、トランスジェンダー女性を受け入れる流れはほぼ作られていったと思われる。入学時点で法的に女性であることを堅持するとしてきたスミス大学も、2014年11月、正式に入学方針に関する研究会(Admission Policy Study Group)を立ち上げ、以後約7ヵ月間で集中的に審議し、理事会の承認を得て大学としての方針を発表していくことになる。この詳細についてはインタビューで述べてもらった通りである。また、11月7日付で学長(Kathleen McCartney)と理事長(Elizabeth Eveillard)から、卒業生を含む大学関係に対して、トランス学生の受け入れについて広く意見を求めるEメールを送付している¹⁶。研究会が発足以前から、他の女子大学と連携をとりつつ話し合われていたが、2014年11月以降、研究会を中心に理事会などでも本格的な検討が始まった¹⁷。

2014年12月にはカリフォルニア州のスクリプス大学(Scripps College)、2015年になると¹⁸2月にブリン・マー大学(Bryn Mawr College)、3月にウェルズリー大学(Wellesley College)という旧セブンシスターズの名門女子大学が次々と入学方針の変更、トランスジェンダー女性の受け入れを表明していった(表2)¹⁹。ウェルズリー大学の発表から2ヵ月後の5月2日、スミス大学のMcCartney学長がトランスジェンダー女性の受け入れを表明した。女子大学へのトランスジェンダー女性の受け入れをめぐる議論の発端となったスミスの決定については、*The New York Times* (May5, 2015) ; *The Washington Post* (Meyer, May4, 2015) などの大新聞も大々的に取り上げ、報道した。この1ヵ月後にはバーナード大学(Barnard College)が続く。

この後も女子大学の入学者規定の方針転換表明は続くが、主だった女子大学の方針変換は2015年には打ち出され、その多くはトランスジェンダー女性については受け入れるとの方向が大勢を占めた。新聞、ウェブサイト等のマスコミによる報道もこれで終わったわけではなく、それ以降もよく取り上げられており、まさに進行形の課題(evolving issue)と言える²⁰。

表2. 主要女子大学のトランスジェンダー学生の受け入れ状況

大学名と州	方針決定時期	トランス女性の入学可否	ジェンダー確認の条件	トランス男性の入学可否	入学後トランス男性となり在籍すること
ホルンズ (Hollins) VA	2007年7月	可	トランス女性は性転換手術を済ませ、法的にも女性となっていること	否	可：ホルモン療法、手術、または名前の変更を伴う性転換をするまで
ミルズ (Mills) CA	2014年5月 (公表は8月)	可	自己認識：出願者は入学課に証明できる情報を提供	一部可：男性化への法的手段をとっていないければ	可
マウント・ホリヨーク (Mount Holyoke) MA	2014年9月	可	自己認識	可	可
ブリン・マー (Bryn Mawr) PA	2015年2月	可	自己認識：大学共通願書で女性を選択していること追加情報を必要とする場合がある	一部可：男性化への医療・法的手段をとっていないければ	可
ウェルズリー (Wellesley) MA	2015年3月	可	未決定*1 (規定は明示されていない)	否	可
スミス (Smith) MA	2015年5月	可	自己認識：大学共通願書で女性を選択していること	否	可
バーナード (Barnard) NY	2015年6月	可	未決定*1 (規定は明示されていない)	否	可
アグネス・スコット (Agnes Scott) GA	2010年4月 以後、4度改訂	可	自己認識	可	可
シモンズ (Simmons) MA	2014年11月	可	自己認識	否	可
スクリプス (Scripps) CA	2014年12月	可	自己認識	否	可
スペルマン (Spelman) GA	2017年9月	可	自己認識	否	可

*1 砂田が訳した2015年のThinkAgain Trainingの表では未決定であるが、2019年3月時点でHPの文言を見る限り自己認識と捉えることができる。両大学とも、受験生が心配な場合は大学の入学オフィスやカウンセラーに相談をするようにと書かれている。

出典：ホルンズからバーナードまでは、砂田恵理加(2017)44頁(原典はThinkAgain Training, "Comparison of Women's Colleges' Policies on Transgender Students,"handout issued on 25 June,2015)。その他は、各大学HPより(「引用文献」に記載)。

(3) インタビューから

スミス大学のトランスジェンダー女性の入学をめぐる方針転換の経緯については、大学管理者側の責任者として対応に当たり、方針策定の中心にいたお二人にインタビューすることができた。インタビューにおいては、率直に話していただく中で、双方から何度か「本当にたいへんでした」という言葉が発せられた。上記のように、学生や同窓生、支援団体、マスコミ、SNSなどを通じて、騒動の発端であるスミス大学への様々な方向からのプレッシャーはいかばかりであったかと拝察した。

インタビューでは、事の発端以後、その件に対する大学当局の対応、具体的な取組みが語られた。繰り返しになるが、2013年4月、トランスジェンダー女性の Calliope Wong が tumblr にスミスからの入学審査拒否回答を掲載したことからこの件が始まったが、こ

うしたトランスジェンダー女性受け入れについてのスミスの検討・対応は迅速ではなかった。騒動の発端から1年余り後の2014年5月24日の*The New York Times*紙の記事(Feldman)で、Smith副学長は、Wongの志願書申請時に問題としたFAFSAや障害証明書などの要件は外すが、その他については変更しないと述べている。内々で検討は行われていたとは思われるが、この時点ではまだトランスジェンダー女性を受け入れへの方針変更はしないという方策が明確に示され、それが社会的にも許容されると考えていたようだ。しかしその後も抗議運動は継続して行われ、8月以降には伝統校であるミルズやマウント・ホリヨークが受け入れを表明することで、抗議運動はさらに勢いを得た。こうした中で、スミスも11月に研究会を立ち上げ、本格的な審議を始めることとなる。Wong事件から1年8ヵ月を経過していた。

Smith副学長、Shaver入学担当部長の双方が、“本当に変化が速かったです”との言葉が何度か口をついて出て、互いに頷いておられたのが印象的であった。性別やトランスジェンダーについての社会における認識の変化が、大学当局者が考えるより格段に速く、その流れを読み切れなかったとの思いがあるようだ。これに関連して、年代によるトランスジェンダーに対する捉え方の違いが大きいことも強調された。学生ら若い人たちは、トランスジェンダーを含め性の流動性について非常に柔軟で、受け入れる用意ができているのに対して、古い世代はその受け入れがなかなか難しく、年代間の意識の差異が大きかったことが語られた。これが対応の遅れということにつながったとも考えられる。インタビューの中で、今の日本の状況は10年前のアメリカの状況であり、“日本でもやがてそうなりますよ”との示唆も語られた。事実、日本でもそうした流れが形成されつつある²¹。

もう一つ、インタビューで強調されたのは、こうした問題に対応する際、“だれも疑問に思わないプロセスを作り上げることが大切だ”ということである。一部の管理的な立場にいる人間が決めて、その議論内容を示さないままに方針を示すのではなく、特に、結論に対して一致が見られないであろう問題においてこそ、どのように議論され、結論が出されたのかというプロセスを公にすることが重要だと述べられた。そのため、入学方針研究会(Admission Policy Study Group)は教員のみならず、職員、学生から選抜され、その氏名や議論をするために使われた資料などもHPにある研究会のサイトで公表されている。またできるだけ広く多くの意見を集めるため、教職員や学生、同窓生(海外在住者を含む)に7,000通以上のメールを送付し、1,800通以上の回答(約25%という高い回収率)を得ている。研究会で様々な意見が出てまとまらないことを懸念したSmith副学長がその旨を学長に伝えると、“(意見がまとまらないことが)悪いことだとは限りませんよ”と述べたと語り、副学長はそのことは正しい判断だったと述懐した。一つの方向に無理やりもっていくのではなく、それぞれの思いを発する自由を保障することで、どのような結論になろうとも、不満は少なくなり、出された結論が許容されるとの意味だと解釈し

ている。結果として、反発が多いかと懸念していたステークホルダー（Stakeholder）である同窓生らからは、反対意見もあったが、圧倒的にトランスジェンダー受け入れ方針を支持する声が多く、安堵するとともに、社会の変化の速さを感じたということであった。

この騒動の発信地ということでスミスには注目が集まり、学内外から有形無形のたいへんな圧力が加かったことであろうが、手間を厭わず公明正大に議論したことが、学生、保護者、教職員、同窓生による方針転換のスムーズな受け入れへと導いたという認識が語られた。もちろん、Wong の件を発端としてこの問題が社会問題として大きく取り上げられ、人々の意識が急速に変化していったという社会的な流れも大きく後押ししたことは確かだろう。

リベラルで進歩的な伝統がスミス大学にはある。個々の House における学生自治、活発な学生運動などはその伝統の一部である。また、1967-71 年にかけてスミスにおいて共学化についてなされた詳細な議論の内容を、デジタル化し公開することを率先して行ってきた（Coeducation at Smith College : a report to the President and the College Planning Committee. By Ely Chinoy）²²。このような風土が、インタビューでの語りの基盤にあると感じた。逆に言えば、そうしたリベラルな大学として知られる女子大学のスミスでさえも、トランスジェンダー学生の受け入れについて躊躇し、判断が遅れた。時代のターニングポイントにあり、それだけ社会の変化が速かったということであろうか。

4. Ohotnicky & Shaw 両氏へのインタビュー：トランスジェンダー学生を含む学生生活への支援

地域コミュニティに開かれたキャンパスには、35 の House と複合施設が点在し、そこでほとんどの学生は卒業するまで生活をする²³。先述の通り、House の運営・管理、諸問題の解決などは学生たちに委ねられ、それがスミス大学の伝統である。こうした学生生活を支える部署で中心的な役割を果たしているのがインタビュー対象の二人である。

インタビューでは共同生活のための行動綱領や学生責任者による監督、提供される様々な学生用プログラムが紹介された他、近年では健康管理のためのトレーニングセンターの充実が強調され、各大学が競っていることなどが紹介された。最近の大きな変化として、学生の精神的な健康を保持するために、サポート・アニマルを部屋で飼うことが全国的に許可されるようになり（the Fair Housing Act の運用による）、スミス大学でもサポート・アニマルを飼う学生が増えている。その関係での学生との交渉、アレルギーなどの対応なども生じ、大変だということであった。また、留学生を含め、人種、民族、宗教、家族の文化的背景など様々な背景をもった人が集まり共同生活をするので、着物や食べ物、礼拝場所の他、LGBTQ やトランスジェンダーについての理解が困難なこともあり、なかなか対応が難しいとも言われていた。様々な課題があり、学生間のいざこざが生じ、自分の

思い通りにはならないことも多々あるハウス・システム（小規模のハウスに分かれて暮らし、学生自治で管理するやり方）ではあるが、部屋を共有する、宿舍会議に参加する、学生リーダーとなる、そして様々な意見をぶつけ合い交渉する、対立調整をする、ともに考えるといった経験をすることで大きく成長していると語られた。ハウスでの生活は学業とともに、大学生生活の両輪なのである。

もう一つの話の中心は、トランスジェンダー学生へのサポートについてであった。トランスジェンダー女性の受け入れが打ち出されたのが2015年5月であり、実際の入学は翌年から可能となるのだが、それ以前においても、入学後にトランスジェンダー男性になることは許容され、トランスジェンダー学生は存在してきた。インタビューでは、トランスジェンダー男性が生活をしていく上で、様々な課題が生じていることが語られた。日常、どのような呼称で自分の名前を呼んでもらいたいかを伝え、周囲がそれを受け止めること。これは学生間では時に問題は生じても比較的容易にできているようで、異なる性的アイデンティティをもっていることに対する許容も学生間ではそれほど大きな問題とはなっていないようである。Smith 副学長らへのインタビューでも指摘されていたように、若者の意識の方がずっと先に進んでいる。むしろ問題となるのは家族との関係であり、トランスジェンダーのみならずレズビアンであっても家族に告白できない、告白すると勘当されると感じ、苦しい精神状態に追い込まれる学生もいて、その支援についても語られた。

このような性的アイデンティティの悩みを抱える者たちへの支援は、個々の House ではもちろん行われているが、大学全体としては The Resource Center for Sexuality & Gender が設けられ、安心して集まり、話せる仲間がいる場が確保され、様々な情報が提供されている。また学内のトイレにおいても、“COED RESTROOM”として、性別を問わず使用できるものも用意されている。スミス大学のあるノーサンプトン（Northampton）付近は進歩的で LGBT の人たちには住みよい場所であるが、これまでの学生たちをみると、卒業後の就職や住む場所では苦勞しているとのことであった。

以上、日々、学生たちの生活、そこ中で生じる問題や悩みに寄り添っている二人の話からは、トランスジェンダー女性をめぐっても今後いろいろな課題が生じることが予測できる。トランスジェンダー女性の女子大学への受け入れについては、理念先行でどんどん進んでいっている感もある。具合的な問題や課題はこれから明らかになり、それへの対応が新たに課されることになる。新たな挑戦は始まったばかりなのである。

おわりに

スミス大学へのトランスジェンダー女性の受け入れ決定過程と、学生への生活支援、とりわけトランスジェンダー学生への日常的対応支援についてのインタビュー二本を本誌に掲載した。特に、Wong のスミスへの出願拒否という出来事は、女子大学がトランスジェ

ンダー女性（まだ性的な外科手術を受けていない）を受け入れる方向に転換する契機となった事件であり、全米の注目を集めた。これに関する論文も見られ、検証も行われている（Drew 2018 とその引用文献を参照）。これまでも多くの女子大学は性的マイノリティを含め多様なマイノリティへの許容度が高く、そうした人々を受け入れる支持的環境を提供してきた。さらに、Smith Q&A の活動に見られるように、マイノリティを擁護する活動家の拠点ともなっている（Drew 2018）。こうした環境や指向性は、今回のトランスジェンダー女性の受け入れを契機に、今後さらに進展していくことが予想される。

性規定の流動化、性自認の多様化が進む中、女子大学が多様な人々を受け入れていくことは社会的正義に叶うものではある。しかし、こうした方向に進むことでさらに女性志願者を集め女子大学のサバイバルにつながるのか、あるいはクウィア（queer）な集団として女性受験生からより敬遠されていくのかは予断を許さない²⁴。受験生の指向は社会正義の問題とは別である。確かなことは、こうした方針を打ち出すことで入学しようとする者もいるが、確実に敬遠する者も出てくるということ、さらに性的マイノリティの受け入れ態勢をどう整えていくのかという大きな課題が待ち受けているということだ。真価が問われるのはこれからであり、同時にこれは近い将来の日本の課題なのである。

注

- 1) 前号（48号）においてオードリー・スミス副学長（入学担当）と、高橋温子先生へのインタビューをそれぞれ掲載している（7-24頁、25-54頁）。スミス副学長には学生募集戦略を、高橋先生にはスミスの伝統・風土や日本との違いを語っていただいた。各インタビューにおいて本科学研究費研究の題目を記したが、著者の単純ミスから不正確な題目を記してしまった。お詫びして訂正する。
- 2) 工学専攻はアメリカの女子大学では初めて創られたもので、2004年に最初の卒業生を送り出した（<https://www.smith.edu/engineering/>）。科学教育の拠点として、自動車会社 Ford からの寄付を基に Ford Hall を 73million ドル（1ドル = 110 円換算で約 80 億円）で 2010 年に完成させている（<https://www.smith.edu/fordhall/overview.php>）。さらに寄付では、Smith's Women for the world campaign として 37,000 名以上の寄付者から 486million ドル（1ドル = 110 円換算で 534 億円）以上集めるのに成功しており、これはこれまで女子大が資金を集めたキャンペーンの中で最高額だと発表した（2017年2月21日）。こうした寄付は、様々な奨学金やプログラムに使用されることになり、強固な資金的な基盤を有している（<https://www.smith.edu/about-smith/gr%C3%A9court-gate-news/gate-story-2017-women-world-486-million-largest-ever>）。
- 3) トランスジェンダーに関しては、アメリカでの動向や国内での講演会・研究会、企業の取り組み、トイレ問題等が報道されるようになっていた。2016年4月10日付け日本経済新聞（朝刊）は、「世界の鼓動」の中で「女子大「心は女性」に門戸 米名門、時代に合わせ変革」（30

面)との記事を掲載し、名門女子大学のトランスジェンダー学生受け入れの動向を紹介している。とには、が、日本の女子大学へのトランスジェンダー学生の受け入れについての報道は、朝日新聞が2017年3月20日に「「心は女性」女子大学入学可能に？日本女子大、検討へ」(朝刊1面・東京)、「「女子とは何か」問い直す大学 トランスジェンダー入学検討 歓迎と課題」(同3面)との記事を報道した後、活発になる。これは日本女子大学で2015年末に付属校へのトランスジェンダー生徒の入学相談があったことを端緒として、LGBTに関するプロジェクトチームを作り、話し合いを始めたことに遡る。この流れの中で、日本女子大学は、2017年度よりトランスジェンダー学生の受け入れの検討を具体的に始めることになったと報道している。朝日新聞の氏岡真弓、杉山麻里子両記者による署名記事で、これが以降の関連記事の起点となった。その後、朝日新聞は全国の76女子大学にアンケート調査を行い、その結果を2017年6月19日朝刊にて「「心は女性」女子大も門戸？5校が検討中3校が検討予定」(1面・東京)、「「多様な女子」支援課題 授業やスポーツ、環境整備検討」(同34面)との見出しで大々的に報道して問題提起を行った。「検討している」と回答したのは、奈良女子大学を除きすべて東京の大学であった。さらに6月25日(朝刊33面・東京)においては「「心は女性」受け入れ検討の理由」とのタイトルで特集記事を組み、津田塾大学の高橋裕子学長と日本女子大学の小山聡子人間社会学部長の意見を掲載した(この記事には、2014年にトランスジェンダー女性の受け入れを認めるように運動しているスミス大学の学生の様子を撮影した写真が使用されている)。記事では、日本女子大学が「大学改革委員会」のもと、学部代表の教員や学生課職員ら8名で会議を開き、課題を検討していくことを伝えた。こうした流れの中で具体的な変化が生じたのは2018年7月である。3日に朝日、毎日、読売、日本経済の主要新聞社はお茶の水女子大学が2020年度からトランスジェンダー学生を受け入れると発表したことを一斉に報道した。さらに10日午前、お茶の水大学の室伏きみ子学長が記者会見を開いて、トランスジェンダー学生の事前申告で受験を認めることを表明し、受験資格も従来の「女子」から「戸籍、または性自認が女子の場合」に改めることを発表し、10日夕刊、11日朝刊の1面で各紙は大々的に報道した。以降もインタビュー記事や社説で取り上げられ、他大学の取り組みが紹介されるなどしている。

- 4) 代表的な著作 *Romance, Family and Nation in Japanese Colonial Literature* (2010) が Palgrave 社から出版されている。1930年代、40年代の日本統治下における台湾、満州、日本の家族や結婚、恋愛などが描かれている。
- 5) 初めての女性学長の名前を冠したこのセンターは、新たな価値を生み出し(技術的なものに限らず、生活全般における価値)、共有しようとする“Innovation”、個々がもつそれぞれの情熱を実行可能な事業に繋げ、実現していけるよう手助けする“Entrepreneurial Spirit”、自分自身や投資のために健全な財務決定ができるように教育する“Financial Education”の三本柱を掲げ、多様なプログラムを提供している。(Jill Ker Conway Innovation & Entrepreneurship Center)

6) <<https://pointfoundation.org/scholars/calliope-wong/>>

このサイトは The National LGBTQ Scholarship Fund である POINT Foundation が運営するもので、2018 年の奨学金授与者の一人として Wong が紹介されており、この紹介ページには、その後の進路についても記載がある。スミスに入学を拒否された後、Wong はコネチカット大学に進学し、英語を主専攻とする医学進学課程 (pre-medical-track English Major) を卒業したのち、スタンフォード大学の医学部に進み、医学学位を取得することを計画しており、ホルモンに関する治療や LGBT の若者に資する研究を行いたいと語っている。

- 7) アメリカで始められた SNS の一種で、メディアミックスウェブログサイトと言われている。テキストや画像、音声などを簡単に投稿できる。
- 8) Calliope Wong “Make Smith Possible for Trans Women” in Trans Women @ Smith, (March 10, 2013 entry)
- 9) Calliope Wong “Thank you.” in Trans Women @ Smith, (August 15, 2012 entry)
- 10) マサチューセッツやコネチカット州において、出生証明書や FAFSA の性別を変えるには、外科手術を受けることによってのみ可能となる。(Reuters, March 29, 2013)
- 11) 出典は同上。(投稿に添付されていたスミスからの手紙の写真)
- 12) Bennett-Smith 2013. “Smith College Rejects Female Transgender Student Calliope Wong; Applicant Ruled ‘Male’ By Admissions.” (Huffpost, March 21.)
- 13) Q&A (Queers&Allies) といった組織は多くの大学で結成されているようである。各大学においてトランスジェンダーに関する課題について、学生や教職員の意識を高めるための活動を行っている。Facebook を使用して主張をし、仲間を集めたり、具体的な抗議活動なども行っている。<<https://www.facebook.com/transwomenatSmith/>>
- 14) この他、ニューヨークのバーナード大学 (Barnard College) において 4 月 9 日に “Gender & Barnard : What Does It Mean to Be a Women’s College?” という会話集会が開催され、女子大学の存立意義の歴史を辿ると、今日におけるトランスジェンダー女性の受け入れは女子大学において必然ではないかとする意見なども紹介されている。さらに、共学大学からスミスに転入してきて、スミスで初めてトランスジェンダー男性だと公表している学生の苦労話なども掲載されている。
- 15) 記事によっては、ミルズが女子大学で初めてトランスジェンダー学生を受け入れたと伝えているが (例えば Huffpost Aug. 25, 2014)、後に訂正を行い、2010 年にアトランタのアグネススコット (Agnes Scott) 大学がトランスジェンダーを受け入れる方針に変えていたと報じている。また本文中の表 2 にも示されているように、ホリズ (Hollins) 大学も 2007 年からトランス学生の入学を認めているが、性的転換手術をして法的に女性になっておくこととしており、非常に厳しい条件を付けている。
- 16) メール内容については、砂田 (2017) を参照。砂田氏はスミス大学の卒業生であり、学長から

掲載の許可を得てメールを日本語に翻訳したものを掲載している。スミス HP の次のアドレスに 2014 年 11 月 7 日付メールの全文が掲載されている (McCartney 2014)。学長からスミスコミュニティへの知らせは、合計 3 度出されている。

- “Admission Policy Study Group”: November 7, 2014
- “Admission Policy Study Group Update”: February 19, 2015
- “Admission Policy Announcement”, May 2, 2015

この他、スミスの同窓生向け雑誌 *Smith Alumnae Quarterly* の Winter2014-15 号、17 頁には学長から同窓生に送付された、トランスジェンダー学生の入学に関して意見を聞くメールの紹介と入学方針研究会の発足などが伝えられ、同誌 Summer2015 号の 11 頁では 2015 年 5 月 2 日に新たな入学方針が発表され、学長や理事長の言葉が伝えられるとともに、詳細についてはワーキンググループを作って検討中であることが書かれている

- 17) 研究会で参考とした主たる資料 (Selected study group resources) は、研究会のアドレスに記載されており、原資料にリンクできる。〈<https://www.smith.edu/studygroup/materials.php>〉
- 18) GLAAD は Calliope Wong が MSNBC に出演し (Jan. 6 2015)、他の女子大学が入学方針を変更しトランス女性の入学を許可するようになっているにもかかわらず、スミスはまだその差別的な入学審査を変えていないと批判したと伝えた。Smith Q&A と協調して取り組んでいることを述べ、スミスに圧力をかけている。
- 19) 2007 年に制定されたホリンズ (Hollins) の規定は、トランスジェンダー学生に対して非常に厳しいものになっている。その後、トランスジェンダー学生をめぐる社会の認識が大きく変化する中でホリンズも見直しを迫られ、2018-19 年度に方針の見直しを図るべく Transgender Policy Task Force を立ち上げて審議し、その勧告書を 2019 年 5 月に理事会に提出することになっている。(“FAQ: TRANSGENDER POLICY TASK FORCE” Hollins University HP)
ウェブサイト *Vox* (North 2017) は、Women’s College Coalition 加盟の 38 大学にコンタクトを取り、トランス女性、トランス男性、non-binary の受入可否を一覧表にまとめている。
- 20) 根強い偏見に対する戦いはもとより、大学内や寮におけるトイレや風呂の使用の仕方、男女で二分されているスポーツクラブへの参加のあり方などをめぐり議論が進行しており、大学における性差別を禁じている Title IX (教育修正法第 9 条) との関係においてもさらに議論が活発化することが予想される。この他、ニューヨークのエリート女子校 2 校においてトランスジェンダー女性の受け入れを始める (Harris, *The New York Times*, June 18, 2018) など、大きな変化が生じている。
- 21) 氏岡・杉山「“心は女性”女子大入学可能に？日本女子大、検討へ」『朝日新聞』(2017 年 3 月 20 日朝刊 1 面・東京)、氏岡・土居・山下「“心は女性”受け入れ進む女子大：お茶大決定に続き 4 校本格検討」『朝日新聞』(2017 年 7 月 10 日朝刊 3 面・東京) など、日本の女子大学でも検討が始まっている。

- 22) スミスやマウント・ホリヨーク、ヴァッサーなど5校からなる“Five Colleges LIBRARIES”〈<https://fcaw.library.umass.edu/>〉から資料にアクセスできる。
- 23) 他の女子大学と異なり、多くの House (Cottage とも言われる) に分かれて住み、その多くは個室に住むという形態が誕生した経緯は、Horowitz (1993) に詳しい。今日でも、4年間を通じてほとんどの学生が House で暮らしている。
- 24) 例えばミルズ大学では、2017年の新入生の51%は性的マイノリティを自認しているとされる(“Diversity and Social Justice at Mills” Mills College HP)。またミルズの学部学生は2013年に997名いたが、2017年には740名と26%も減少しており、財務が危機的状况に陥り、5名のテニユア (Tenure) 資格を持った教授を解雇することを発表した (Asimov 2017)。

引用文献

Drew, S. 2017. Challenging Gender at a Women’s Institution : Transgender Admission and Inclusion at Smith College. *Women Leading Change* 3(2), pp.25-36.

“Gender and admission: College to review its policies in light of evolving conversation about identity.” 2015. *Smith Alumnae Quarterly*. Winter 2014-15, p.17.

Horowitz, H.L. 1993. *ALMA MATAR : Design and Experience in the Women’s Colleges from Their Nineteenth-Century Beginnings to the 1930s*. (2nd ed.) U. of Massachusetts Press.

“Opening the gates: Transgender women to be considered.” 2015. *Smith Alumnae Quarterly*. Summer, p.11.

砂田恵理加 2017. 「フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方：トランスジェンダー学生の受け入れをめぐる」『政経論叢』(国土館大学) 29 (1), pp.25-50

“Diversity and Social Justice at Mills. : Gender and Sexuality Resources.” (n.d.) 〈<https://inside.mills.edu/diversity/gender-sexuality-resources.php>〉

新聞・ネット記事 (年代・日付順)

・2012-2013年

Wong, Calliope. 2012. “Thank you.” in Trans Women @ Smith, (August 15 entry) 〈<https://calliowong.tumblr.com/post/45074030481/thank-you>〉

Wong, Calliope. 2013. “Make Smith Possible for Trans Women” in Trans Women @ Smith, (March 10, entry) 〈<https://calliowong.tumblr.com/post/29467307825/make-smith-possible-for-trans-women>〉

Bennett-Smith, M. 2013. “Smith College Rejects Female Transgender Student Calliope Wong ; Applicant Ruled ‘Male’ By Admissions.” *Huffpost*, March 21, 〈https://www.huffpost.com/entry/smith-college-transgender-calliope-wong_n_2920845〉

DiBlasio, N. 2013. “Smith College rejects transgender applicant.” *USA Today*, March 22. 〈<https://>

www.usatoday.com/story/news/nation/2013/03/22/smith-college-transgender-rejected/2009047/

James, S.D. 2013. "All-Female Smith College Returns Transgender Woman's Admissions Application" *abc NEWS*, March 25. <<https://abcnews.go.com/Health/female-smith-college-returns-ransgender-womans-admissions-application/story?id=18805681>>

Howard, Z. 2013. "Elite women's college rejects transgender student, prompts outcry," *Reuters*, March 29. <<https://www.reuters.com/article/us-usa-college-transgender-idUSBRE92R0YT20130328>>

"Smith College group to deliver petition on transgender policy to administrators." 2013. *MassLive.com*, April 30. <https://www.masslive.com/news/2013/04/smith_college_group_to_deliver.html>

Mogan, G. 2013. "Student Group Deliver Petition To Smith College After Calliope Wong, Transgender Student, Was Rejected." *Huffpost*, May 1. <https://www.huffpost.com/entry/calliope-wong-transgender-petition_n_3194600>

Constantine, S. 2013. "Smith College activists present administrators with petition supporting transgender women applicants." *MassLive.com*, May 2. <https://www.masslive.com/news/2013/05/smith_college_transgender_righ.html>

• 2014 年

Heffernan, D. 2014. "GLAAD speaks to BuzzFeed about need for trans-inclusive admissions policy at Smith College," *GLAAD.org*, April 22, 2014 <<https://www.glaad.org/blog/glaad-speaks-buzzfeed-about-need-trans-inclusive-admissions-policy-smith-college>>

Merevick, T. & Yandoli, K.L. 2014. "Smith College Students Continue Fight Over 'Discriminatory' Policy on Transgender Applicants," *BuzzFeed*. April 22. <<https://www.buzzfeed.com/tonymerevick/smith-college-students-continue-fight-over-discriminatory-po>>

Feldman, K. 2014. "Who Are Women's Colleges For?" *The New York Times*, May 24. <<https://www.nytimes.com/2014/05/25/opinion/sunday/who-are-womens-colleges-for.html>>

Cummings, A. & Spade, D. 2014. "Women's Colleges Are on the Wrong Side of History on Transgender Women." *TIME*. June 9. <<http://time.com/2848822/womens-colleges-transgender-women/>>

Nichols, J. 2014. "Mills College Changes Policy To Allow Transgender Students To Enroll." *Huffpost*, Aug. 25. <https://www.huffpost.com/entry/mills-college-transgender-students_n_5710441>

Witkin, R. 2014. "Mills College Is First Women's College To Openly Accept Transgender Students." *the new civil rights movement.com*, Aug. 28. <http://www.thenewcivilrights movement.com/mills_college_is_first_women_s_college_to_openly_accept_transgender_students> Sept. 12, 2017 アクセス

Jaschik, S. 2014. "Trans Applicants Welcome : Mount Holyoke College adopts formal policy to admit students who are female or who identify as women." *INSIDE HIGHER ED*, Sept. 3, <<https://>

www.insidehighered.com/news/2014/09/03/mount-holyoke-will-now-accept-applications-transgender-women

Mosbergen, D. 2014. “All-Women’s Mount Holyoke College Changes Policy To Welcome Transgender Students.” *Huffpost*, Sept. 3. <https://www.huffpost.com/entry/mount-holyoke-transgender-policy_n_5760952>

Padawer, R. 2014. “When Women Become Men at Wellesley.” *The New York Times*, Oct. 15. <<https://www.nytimes.com/2014/10/19/magazine/when-women-become-men-at-wellesley-college.html>>

• 2015 年

Moyer, J.W. 2015. “Smith College to admit transgender women in historic policy change.” *The Washington Post*, May 4. <https://www.washingtonpost.com/news/morning-mix/wp/2015/05/04/smith-college-to-admit-transgender-women-in-historic-policy-hange/?utm_term=.2c06be4e75cc>

“Transgender Students at Women’s Colleges (Editorial).” 2015. *The New York Times*, May 5. <<https://www.nytimes.com/2015/05/05/opinion/transgender-students-at-womens-colleges.html>>

• 2016 年以降

Asimov, N. 2017. “Mills College opts for layoffs over admitting male undergrads.” *San Francisco Chronicle*, July 11, 2017. <<https://www.sfchronicle.com/education/article/Mills-College-opts-for-layoffs-over-admitting-11279276.php>>

North, A. 2017. “Can transgender students go to women’s colleges? Across the country, the answer is evolving.” *Vox*, Sept. 22. <<https://www.vox.com/identities/2017/9/21/16315072/spelman-college-transgender-students-womens-colleges>>

氏岡真弓・杉山麻里子 2017. 「“心は女性” 女子大入学可能に？ 日本女子大、検討へ」『朝日新聞』（2017年3月20日朝刊1面・東京）

氏岡真弓・土居新平・山下知子 2017. 「“心は女性” 受け入れ進む女子大：お茶大決定に続き4校本格検討」『朝日新聞』（2017年7月10日朝刊3面・東京）

Harris, E.A. 2018. “New York’s Elite Girl’s Schools Are Starting to Admit Transgender Students.” *The New York Times*, June 18. <<https://www.nytimes.com/2018/06/18/nyregion/new-york-schools-brearley-transgender.html>>

“Meet Our Scholars : Calliope Wong” (n.d.) Point Foundation HP <<https://pointfoundation.org/scholars/calliope-wong/>> *2018年の奨学金授与者の一人として紹介されている

• 女子大学の入学方針・入学資格が記載されている HP アドレス

Agnes Scott College <<https://www.agnesscott.edu/president/presidential-committee-diversity/statement-on-gender-expression-and-gender-identity.html>>

Barnard Collage <<https://barnard.edu/admissions/transgender-policy>>
Hollins University <<https://www.hollins.edu/on-campus/student-life/new-student-info/policy-on-transgender-issues/>> & <<https://www.hollins.edu/who-we-are/our-president-leadership/trustee-task-force/faq-transgender-policy-task-force/>>
Mills College <<https://www.mills.edu/admission-aid/undergraduate-admissions/how-to-apply/transgender-admission-policy.php>>
Mount Holyoke College <<https://www.mtholyoke.edu/policies/admission-transgender-students>>
Scripps College <<http://inside.scrippscollege.edu/news/admission-policy-update>>
Simmons University <<http://www.simmons.edu/news/messages-to-the-simmons-community/2014-november/undergraduate-transgender-admission-policy>>
Spelman College <<https://www.spelman.edu/admissions/frequently-asked-questions#revised-policy>>
& <<https://www.spelman.edu/about-us/office-of-the-president/letters-to-the-community/2017-09/05/spelman-admissions-and-enrollment-policy-update>>
Wellesley College <<https://www.wellesley.edu/admission/faq#caniapplytowellesley>>

・ スミス (Smith College) 関連のアドレス

McCartney, K. & Eveillar, E. 2014. "Admission Policy Study Group." Nov. 7. <<https://www.smith.edu/president-kathleen-mccartney/letters/2014-15/admission-policy>>
McCartney, K. & Eveillard, E. 2015. "Admission Policy Study Group Update." Feb. 19. <<https://www.smith.edu/president-kathleen-mccartney/letters/2014-15/admission-policy-update>>
McCartney, K. & Eveillard, E. 2015. "Admission Policy Announcement." May 2. <<https://www.smith.edu/president-kathleen-mccartney/letters/2014-15/admission-policy-announcement>>
"Admission Policy Announcement: About the Study Group." (n.d.) <<https://www.smith.edu/studygroup/about.php>>
"Admission Policy Announcement : Selected Study Group Resources." (n.d.) <<https://www.smith.edu/studygroup/materials.php>>
"Gender Identity & Expression." (n.d.) <<https://www.smith.edu/about-smith/diversity/gender-identity-expression>>
"Jill Ker Conway Innovation & Entrepreneurship Center." (n.d.) <<https://www.smith.edu/academics/conway-center>>

※ ネット資料のうち、アクセス日のないものは、2019年3月1日～2日に所在を確認した。

付記 本研究は、2015-2018年度・科学研究費助成事業（基盤研究C）「女子大学の存立意義とサバイバルストラテジー：日本・アメリカ・韓国の国際比較」（課題番号15K04327）による研究成果の一部である。（なお、本研究は、2019年度まで延長する予定である。）